

氏名	福本 双紅
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	第 110 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	陶造形における自然と作為 - 「おのずから」と「みずから」の「あわい」 -
審査委員	主査 教授 長谷川 直人 教授 吉田 雅子 教授 秋山 陽 外館 和子 (工芸評論家) 竹内 整一 (鎌倉女子大学教授)

## 論文の要旨

陶造形には、他の造形にはない独特の事情がある。例えば、仕上げの段階で、火による化学作用によって、土による造形は収縮し、軟化し、へたり、変形し、固まり、もとの可塑性のある粘土には戻らないなど、変化をもたらす焼成のプロセスがある。そのため、後戻りをしてやりなおしができない不自由や、プロセスの途中で仕上がりを予測する困難など、意のままにならない要素がある。このような陶造形において、制作者のとりくみ姿勢に、どのような受けとめ方・考え方があるのかを、さまざまな制作事例や理論、またその背景にある思想文化論などをふまえて、あらためて考えようと論述をすすめた。そこで主題化してきた問題が、陶造形における自然と作為の関係性である。それをどのように見極め、論述するかについて、近・現代の作例、作者や論者の言葉、また、制作者である筆者自身の制作プロセスなどの考察にとりくんだ。そのなかで大きな示唆を得たのが、「おのずから」と「みずから」の「あわい」という発想であった。

本論では、まず、陶造形における意のままにならない「不如意」の要素をとりあげた。作者が主体的に表現するためには「不如意」の要素を克服し、素材や技法を意のままにコントロールする力量が必要だと、しばしば考えられてきた。しかし筆者は、陶造形の「不如意」の要素を必ずしも克服すべき負の要因と考えるのではなく、正の要因としてとらえるほうが、むしろさまざまな可能性を見いだすことができるのではないかと考えてきた。

そこで「不如意」という制約や不自由さの裏にあるもの、例えば「自然」や「自由」をどのようにとらえるかについて、近代的な西洋の考え方とは異なる日本人の考え方・感じ方を検証した。工芸評論家の乾由明氏、倫理学者の竹内整一氏、言語学者の大野晋氏らによる先行諸説を参考に、日本文化の基本的傾向・理念・性格と、陶芸の関わりについて考察をすすめた。

様々な論考にあたるなかで、日本人の心のうごきや道徳の理想、憧憬の境地には、自然と自己、

自然と自由、物と自己、つまり「おのずから」と「みずから」が峻別されず、「融合相即」が目指されていたという指摘に着目した。そのような考え方や感じ方は、私たちの日常の暮らしの習慣や感情、判断の仕方などにもしのびこみ、私たちが「為す」ことは、私たちにとって「成る」ことでもあるという意味も含まれていることになる。しかし、明治近代に nature の訳語を「自然」として受け入れて以来、自然は人間に「対立」する一つの対象であるとする考え方がこの日本に浸透している。現代の私たち日本人は、自然と人為を「融合相即」でとらえる日本古来の傾向と、西洋的概念の影響による「対立」でとらえる傾向という、双方の異質な考え方・感じ方を同時に持ち合わせているということになる。

そこで、このような双方の異質な傾向が、陶芸家の創作意識にどのように反映しているのかを探った。双方は、思いのままの作為を貫くために自然の克服を目指す傾向と、制作プロセスに見られる自然の成り立ちと作者の創意の融合を目指す傾向に対応する。そして、筆者の目指す陶造形は明らかに後者の傾向に属することを確認し、それを理論的・具体的にいかに理解するかを問題とした。

その上で重要な鍵となったのが、近年研究がすすめられている「あわい」や「ゆらぎ」の発想である。「あわい」の発想とは、「おのずから」（自然・現象）と「みずから」（自己・作為）の両者の関わりを、相互に行きかう動的な関係性としてとらえようとする考え方である。また、「ゆらぎ」という予測しきれないズレを含む変化は、物理の世界や人工機械では邪魔なもの・負の要因として切り捨てられてきたが、予測しきれない変化こそが研究対象であり、むしろ新たな道を拓く正の要因としてとらえなおそうとする考え方が「ゆらぎ」の発想である。これらの発想は、あいまいさを巧みに受容・利用する柔軟性や、さまざまな矛盾や相克を組み合わせて熟考する能力、繊細で柔軟な包容力を自覚的に営むことに、あらためて可能性を見いだそうとする考え方を提供している。このような「あわい」や「ゆらぎ」の発想は、陶造形における可能性や意義を見いだすための重要な示唆があると考えた。

そこで筆者自身の、制作プロセス、釉着技法、無釉白磁と透明釉の色彩、展示などにおいて、「おのずから」の自然の現象と、筆者「みずから」の作為にどのような「あわい」の関わりがあるのか、その関わり方如何を具体的に考察した。その結果、筆者の実践制作は、予測しきれない「おのずから」の現象に目を向け、それと筆者「みずから」の作為とは双方向から張り合い、調和し合い、影響し合うことにより生まれる造形であることが明らかになった。

このような問い直しによって、筆者が確実に得たものがある。それは、「あわい」のあり方を限定することなく、「おのずから」と「みずから」の動的な関係性を、その都度の制作実践において活性化させ続ける努力の必要性を、より深く認識したことである。そして、常に予測しきれない現象に目を向け、それを受け入れようと心をひらき、「あわい」が真に動的であるかどうかを問い続けてゆく先に、新たな創造の可能性が拓かれてくるという予感を得たことである。筆者自身の作品の独自性も、そうした生きた「あわい」を強く意識するところに生ずるものである。

自然と作為との関係性は、陶造形において普遍的な命題である。それが永遠の課題であることを幾重にも確認した上で、「おのずから」と「みずから」の「あわい」という動的な関わりのあるあり方を追求し続けてゆくことが、陶造形の豊かな可能性を拓いてゆくことと確信している。

## 審査結果の要旨

福本氏は一貫して、積み上げられた白磁による器状の形を釉着させるという独特な方法を使った作品を中心に制作してきている。

博士論文審査作品としての展示の中心となっていたのは「うす雲」「月影」「月の雲」「しのめ」の4つのシリーズ作品群である。そして、これらに加え新しい試みをおこなった「ゆくかた」シリーズが展示された。

福本氏の作品は、いくつかの磁器の器形を接触面に釉薬を施し重ねて焼成したものと見える。「うすぐも」は上下に違いに口を合わせた椀状器形の中に数個の輪形を挟み込んで、釉着させたもの。

「月影」は大きさの異なる数点の鉢状の器形を重ね釉着させたものである。そして、「月の雲」は数個の鉢から切り出した器形の一部を少しずつ重ねながら釉着し、ひとつの大平鉢のような形に仕上げたものである。最後の「しのめ」は、底部を取り去った大壺を大平鉢の上に釉着により接合したものである。

それらの一連の作品では轆轤成形や乾燥過程での微妙な形の変化を、そして焼成時の焼き歪みや釉薬の熔化によるズレを許容し、あるいは待ち受けて微妙な極めて緊張感のある造形物としている。それは、焼き物の特性である成形や焼成の中で起こる様々な偶然起こることを巧みに利用して作られた典型的な陶磁作品のように見えるかもしれない。

しかし、他にも釉着という方法を用いた作家はいても、この焼き締められた白磁とその間を繋ぎ釉着させている美しい釉が際立つ作品はきわめて独自性の高いものである。(朝日現代クラフト展グランプリ、京都府工芸新鋭選抜展最優秀賞、京都市芸術新人賞、五島記念文化賞美術新人賞、京都府文化賞奨励賞や日本陶磁協会奨励賞など多くの受賞歴があり、また国内外で多くの個展や企画展の招待出品をするなどしており高い評価を受けている。)

これら作品群の個々の器形は焼成の過程でお互い作用を及ぼし合い微妙にゆらぎ、また位置関係も動く。それらのかたちは響きあい、そして隙間も揺らいだかたちと釉の色とが織りなす「空間」となる。これは偶然につまり土の物性に委ねただけなのか、それを計算に入れて作為的に自然らしくみせているのか……。福本によるとそのどちらでも無いという。確かにある方向へ導きはするが、「おのずから」と「みずから」つまり、作者と自然との「融合相即」を目指しているのである。

そして、それは論文で述べているようにしばしば焼き物において論点となる「無作為と作為」に対する深い思惟と葛藤の結果なのである。福本氏はこれらの制作をとおして考察してきたことを「おのずから」と「みずから」の「あわい」をキーワードにして論文中で考察した。

福本は論文中に「自身の制作に初めて充実感を覚えたのは、火や土の成り立ちと、作者の作為が一体となって作品になったと実感できたときであった。

現象を主体的に計画的に制御することよりも、創作工程において、未知の現象を引き出すことを積極的に試み、それに対して、「みずから」の感性や技量を発揮して瞬時に対応する、そこに、「ひらめき」や「直感」、「新鮮な発見」の「一瞬」があれば、このうえない感動を抱くことができる。それが、筆者自身の予測や期待を超え、「おのずから」の現象によりもたらされたものだと実感できれば、これこそが、自ら直接素材と向き合い、自身の手業を通して作陶する意義だと思えるのである。」と

述べている。

このように土と火と向き合い、それとのあいだのやりとりのなかで作品をつむぎだしていくことは工芸、ことに焼き物の中では普通のことであるとの指摘もあるであろうが、このことを正面から捉え作り手の側から真撃に論じられることは少なかったように思える。

そしてさらに、それらの作品の過程で「これまで火や土の成り立ちと、筆者の作為が交差・均衡・融合したと実感できる制作を目指しているつもりでいたが、いつのまにか「みずから」の作為や価値観主体性を無理に押しとおそうとするような髓酷がどこかにある」と気づき、最近作である「ゆくかた」を制作したのである。そこではそれまで破綻として切り捨て、見落としてきた様々なことをすくい上げ、これからの制作にむけての大きな一歩となっている。ただ、本人はその結果に関して判断は容易では無いと記述している。これに関して「従来の作品においてはロクロによって成形された回転体を複数組み合わせたり、切断したり、変形を加えたりして全体を構成することが基本となっているが、そこに“記号としてのうつわ”の要素も認めることができ、そのことが作品を親しみやすく独特なものにしていると考えられるが、「ゆくかた」においてはその要素が後退し、物質の変容が主題になってきているようにも思われる。そのことについてどのように考えているのか。」との質問もあったが、まだ明快な回答はないようである。

しかしながらそれはこの一連の論考の結果、新たな一歩を踏み出したということであり当然これからの創作を経ていく中で徐々に明確になっていくものと期待される。

福本氏の作品は陶磁作品の本質を問う作品を常に目指してきたと言える。また、この論文も陶磁制作における普遍的な問いかけを自らの制作活動を踏まえて独自の視点で考察したものと言え、その問題に対して明確な回答を導き出したものではないが、(そもそもひとつの答えがあるのではなく、それぞれの作家なりのあり方があるのみなのだ。)その葛藤の過程を赤裸々に書き綴って見せたものである。

まさにこの点において貴重であり、独自の研究となっているのである。このことにより多くの焼き物を目指す作家や学生たちに大きな示唆や勇気を与えるものと確信している。

以上を総合的に審査した結果、福本氏の論文は、本学博士課程の水準に十分に達していると判断し、審査委員全員一致で合格とした。